新刊紹介

京都の災害をめぐる

橋本　学［監修］
大邑潤三・加納靖之［著］

小さ子社
発売日：2019 月 9 月 30 日
定価：本体 1,600 円＋税
ISBN: 978-4909782038
14.8 x 1.2 x 21 cm　A5 判
オールカラー
128 ページ

地震と地理を専門とする二人の著者による，旅行書の体裁で書かれた京都の歴史災害研究に基づいた啓蒙書であり，古文書による災害史研究の成果を旅行書仕立てにした力作．京都に土地勘がある方々にも，観光として訪れる方々にも，通常の観光とは少し違った視点を持って楽しむことができる．

本書の構成は以下の通りである．最初に，1596 年–1953 年の間に，近世以降京都を襲った主な災害（地震 4 件，風水害 4 件，大火 2 件）の概要が書かれている．これだけでも，京都がいかにさまざまな災害を被ってきたかが明らかになる．次に，災害そのものの爪痕やそれに対する人々の思いが感じられる地点，史料など災害の記録を残している地点に加え，災害・防災について理解が深められる場所・施設の紹介がなされる．左京北部，御所・左京南部，上京・洛北，右京，二条城・西京，下京・洛南，東山，伏見・淀，宇治・南山城の 9 つの地域毎に，180 地点にわたっており，本書の大部分を占める．さらに，9 つのコラムで，さまざまなトピックがとりあげられやや詳しい解説がなされている．最後に，参考文献一覧があげられ，そのうち「史資料・WebGIS 等（オープンなもの）」は，特設ページ（https://www.chiisago.jp/kyoto-saigai/，閲覧日：2019 年 11 月 7 日）にもある．

テンポよく書かれていることもあり，京都の地理・地名に詳しい方々には面白く読めるが，土地勘のない方々への“旅行書”としての啓蒙・案内書としては，もう一息の工夫が必要と感じる．さまざまな方に広く手に取られていくことを期待するので，あえて注文をつけたい．

1）参考文献や WEB リンクの記載はあるが，用語索引が全くない．そのため「一般向けの入門・啓蒙書」を目指したと「あとがき」には書かれているが，読後に記憶を辿って辞書的に使うことが全くできないため，啓蒙・案内書として成りきれてないのが残念である．デザイン的には美しくないのであろうが，各地点の見出しにもルビがあった方が親切だと思う．

2）限られた紙面という制限があるのは承知の上だが，写真にもう一工夫が必要と感じる．挿入写真の解像度が悪く，特に，記念碑・石碑・説明板などの写真において，文字が読めるものはほとんどないこと，および，ほぼ全てにキャプションがついていないことが，本書の本来の目的の意図と乖離している．

3）その地点の解説を読むだけで理解できるようにとの配慮であろうが，説明が重複する部分も散見される．例えば，K-NET 観測点は 4 ヶ所で，Hi-net 観測点は 2 ヶ所で紹介されているが，【コラム 1：地震をどうはかる？】において，まとめて説明するなどの工夫も必要だと感じた．

4）古文書を多読されている研究者が書かれているためか，現代の通称とは異なるルビがついているものもあるが，その説明が見当たらない．例えば，p. 91 では，花折断層に“はなおり”とルビがふられているが，“はなおれ”と耳にすることが多い．

ePub の形式に作り直してスマホなどで見ることを前提にすれば，上記の不満のほとんどは解決するのではないか．特設ページには更に各種情報が盛り込まれる予定とのことなので，それに期待したい．

ところで，54 ページの「65 神護寺」の説明で，山門が地震で 90 度回転するとは考えられない，とあるが，なぜそう考えられるのでしょう？

（産総研 地質調査総合センター 地質情報研究部門　岸本清行，
同　活断層・火山研究部門　田中明子）